



論說

歌道の變遷

(前々號の續き)

教授 蜂

嶺

第四章 詠歌法

既に我が國民詩歌の一たる和歌は題詠となり、歌人か支那の詩話或は己れの經驗より案出したる式目は歌道として父子相續き師弟相承け、其間嚴重なる束縛を以て傳へられたり、抑々歌道なるものは要するに悉くこれを詠歌法と稱するを得べし、然れども余がこの章に於て論せんとする詠歌法はさる廣き意味のものにあらず狭義の意味に於ての詠歌法なり、和歌製作の工夫たる詠歌法の適否により其の歌人に及ぼす影響の大なるものあるは論を待たずして明なり、第一期の詠歌法は果して詩歌製作の指導者として吾人の仰ぐべきものなるか、これ余が今より研究せんとする問題なり。先づ當時歌學者の詠歌法につき如何なる考を有せしかを擧げん(古事類苑文學部に詠歌法の節あれば詳細は彼の書に譲る)。

悦目抄曰、一歌を必ず上の句よりよまむと思ふべからず、上よりよまるゝ歌もあり中より讀まるゝ歌も、すそよりよまるゝ歌もあるをよまれぬ所よりよまんとすれば終日終夜案すれ共出こぬものなり、又歌を讀

まんまきは心を一所にたかすして十方にはしらかして山野河海にやさしき風情をもとむべし、心を種とする故に種自然に出くるなり、

夜の鶴曰、歌を案するに初の五文字より次第に讀み下され候事は申すに及ばず、さては歌讀む心地とて常にうけ給はり候しは、先下の七七の句を、よくあんでのちに初の五文字をすゑにかなふやうに、よくく、思ひ定むべしとぞ候ひき上の句より次第によむほごに末よわになる事に候へばその用心と覺む候。

此等の説は五七調より七五調に變遷しつゝあるをいふものにあらずや、二書のこの詠歌法によれば新古今に最も多く表はれたる句の轉換は自然と發生すべき理なり、古今集の和歌は文法の順序に従ひて詠じたるもの多し、然るに新古今に至りては一句絶、三句絶、盛に行はれ、五句絶、四句絶等は甚だ稀なるに至れり、當時の歌學者は既に和歌の文章法の自然に變遷しつゝあるを自覺せず、只漫然此の如き説をなせしか、はた又歸納的に諸歌集に於ける句調の變化を研究して其結果より此等の説をなせしか、次に句格に關したる研究は

愚秘抄曰、歌に必ずきるところ一所有るべし、二所にてきらす事世にわろき歌の基なり、第五句にてきらする歌よろしき姿とすべきにや、いかにも親句の歌は第五句にてきるとなりこれ神妙の体なり、第四句にてきらする歌はまれなり、初五文字にてきらす歌はふるまい歌に多分侍る、第三句にてきらす歌はなごやらんあひをなきこゆるべし、いづれと申すとも第二句にてきらする歌は幽玄のすがたなり、但しいづれの句にてもあれめづらしくつづけがらだにもよろしければ苦しからず、一偏をまもるべからず、

二句絶、五句絶を以て最も普通なる、また、高尚なる短歌の形とせり、三句絶は腰折歌なりといふにあり、此の

如く句格より和歌を論じたるは歌道變遷史上第三期橘守部の短歌選格と愚秘抄あるのみ、果して此の説が詠歌法として吾人の服すべきものなるか、二句絶は幽玄にして三句絶は腰折なるか、其の適否得失の論は守部の短歌選格の章に於てすべければ茲に略す、次に當時の歌學者の歌詞の研究としては

詠歌大概曰、情以新爲先詞以舊可用風体可倣堪能先達之秀歌近代之人所詠出之心詞雖一句謹而可除之 中野和歌無師匠唯以舊歌爲師染心古風習詞於先達者誰人不詠之哉

「詞以舊可用詞不可出三代集」とは、第一期第二期を通じての一般の説にして稀には愚秘抄の「一傳當家最秘の口傳には詞は新らしく心は古かるべし」など説くものなきにあらざれども、極めて無勢力の論たるに過ぎざるなり、抑々詠歌大概の説の如く常に三代集の詞を用ゐて新思想を詠じ得べきか、余信する能はざるなり。夫れ言語は思想の代表者なり、思想の結果なり、而も此の思想は日夜變遷進歩して止まらず、故に言語上に常に新陳代謝あるは自然の勢なるは識者を待たずして明なり、然らば新時代の思想を詠せんには害なき限り新時代の言語を用うるを可とす。勿論或る程度までは昔日の言語も意義變化の理により新思想を詠じ得べしと雖、極力三代集を尙び三代集の詞を用ゐて詠じたるは亦三代集の歌たるを免れざるなり、堪能先達の秀歌に倣ふ惡しきにあらず、然れども此の時代の一般は極めて尊崇するの余り、古歌に盲從的となり、従て時勢の潮流と共に進歩すること能はず、苟も耳新らしき詞を用ゐるか、左道なり異端なりとて歌學界より排斥す。これ當時の和歌をして徒に三代集の摸倣に終らしめ而も孔子を學んで孔子たる能はず、三代集の句を上下に轉じて用うるものあり、或は三代集の雜の歌を取りて己れの四季の歌とし平然たるものあり、季吟の八代集抄の調査のみにて新古今集の歌の總數千九百七十八首の中古人の歌を本歌として詠じたるもの五十余首あり、猶詳細

に研究せば其結果驚くべき多數に至るべし、而も悦目抄には「古歌を取ること第一の大事也上手の見ゆる事なり」といひ作歌故實に「近き世の人の歌集をもてはやし其の心をも詞をも我が物顔に取りなせるはいとく口惜し、古き歌は本歌にもとり詞をまなぶこと常なれど近き世の歌を隠し取るは盗人の仕業なり」といへり、「取る」といひ「盗む」といふ古今の差こそあれ等しく我心にもなき事を歌ひ世を欺きたる点に於ては一ならずや、此の如き歌學の下に安ぞ和歌の發達を期すべけんや。

第五章

弓爾乎波研究と辭書

歌道史に於て茂睡以後と其以前との異なる所は茂睡以前の所謂歌道は、第三期の歌人が研究せし歌學のみならず國語學の範圍に屬する弓爾乎波及び辭書の類をも含めり、然るに茂睡以後に至りては是等の學は歌道界を去り國語學研究の一部とせられ歌學者は純然たる歌論のみを研究するを歌道の本領とし、其他は顧みざりき、即ち第三期の歌道は其以前に比すれば狭くして深きものなり、余茲に宗祇以前の歌道の一として歌學者間に傳授されし弓爾乎波研究の大畧を陳べんとす、八雲御抄の用意部なる一節に「歌道に於ては手爾乎波の用意は尤も大切なり」とある如く第一期の手爾乎波研究は歌道より來りたるものなれば、手爾乎波の性質活用に付きては一も研究する所なく歌の中より此の如き手爾乎波あり、彼の如き手爾乎波ありといふにすぎず、猶歌道と手爾乎波との關係を陳べしは手爾乎波大概抄に詳なれば左に擧げん。

倭歌手爾乎波者唐土の置字也以之定輕重之心音聲因之相續人情緣之發揮也學者以先達之秀歌不勝敢爲自得焉詞如社手爾乎波如莊嚴以莊嚴之手爾乎波定寺社尊卑詞雖有際限新之自在之者手爾乎波也無盡心於是顯然矣豈忽諸哉座句手爾乎波連續之留不能容易詠之多下句枯而歌姿虛弱也殘題於末所先達教中人以下也并達

人善之鬼神感之落涙出之矣

手爾乎波研究につき第一期に現はれたるものを、手爾乎波大概抄、姉小路式の二書とす、手爾乎波大概抄は〔手爾乎波と詞との關係〕〔詠歌上座句言切詞不言切詞〕〔手爾乎波の使ひ分け〕等に章を分てり、例へば

や 一なりや 二、疑のや

三、手爾乎波のや 四、願のや

五、とがめのや

六、言葉のや

七、ためしのや 八、押量るや

九、残る言のや

十、畧のや

等にして定家卿が其子爲家のために歌道上、手爾乎波の忽にすべからざることを教へられたるものなりといふ、又姉小路家代々の傳授たりし十三ヶ條口傳あり「撥ね手爾乎波の事」ぞ」「こそ」「や」「か」「かは」「假名を休むること」等あり猶詳細なることは宗祇以後の歌論に於て述べんとす。兩書を敷衍したるものは手爾乎波大概抄之抄、春樹顯秘抄、歌道秘藏錄、當流家傳、飛鳥井和歌式等なり大概抄姉小路式二書果して誰の書なるや確に知るべからず然れども第一期に屬するものなることは明なり、吾人は是等の書により當時の歌學者が和歌の上になしたる文章法及び修辭學上の研究の一端を知るべく又彼等が如何に手爾乎波を使用せしか、如何なる見解を手爾乎波につき抱きしかを知り、以て歌道の如何に國語學的研究と關係して變遷したりしかを窺ふことを得べし、茲に一言せざるべからざるは此等の歌道より來りたる手爾乎波の研究は頗る不完全たるを免れざれども後世本居富士谷の學説は多くは茲に得たるものなることは大に注意すべきことなりとす。

余が此の章に於て歌道に於ける辭書と名けたるものは此等が平安朝の辭書と形式の頗る相似たるを以て便宜上此の如き名稱を附したるものにして、内容に至りては稍々其の趣を異にせるものなり、抑々平安朝の辭書は木村博士(學士會院雜誌)小中村博士(皇典講究所講演)の説に依ると、天武天皇十一年の新字、醍醐天皇昌

泰年中の新撰字鏡、源順の作なる和名類聚抄菅原是善の作と傳へらるゝ類聚名義抄字鏡集其他二三種にして、此等の辭書は要するに支那字を主として、これに訓即ち日本語を記したるものなれば、其體裁より云へば日本辭書とはいひがたし、中本論に關係あるものは新撰字鏡和名類聚抄の二書とす、本論に入るに先ちこれ等の二書につき聊か述べざるべからず。

新撰字鏡十二卷僧昌住の作にして天、日、月、肉、雨、氣、風、火等の十一に分類し文字を集め字毎に四聲反切と和訓を記し和名抄と全じく萬葉假名なり。和名類聚抄は醍醐天皇第四の皇女勤子内親王の爲めに源順が撰びたるものにして二十四部百二十八門に分類して言葉を集めたり、今左に二十四部の名を擧げん、

天地 人倫 形体 病疾 術藝 居處 舟車 珍寶 布帛 裝束 飲食 器皿 燈火 調度 羽族 毛群
牛馬 龍魚 龜貝 稻穀 果鹹 草木 虫介

此等辭書分類の形式、歌學書の上に其影響を及ぼし、和歌童蒙抄、師說自見抄、綺語抄、等の書即ち第一期の歌道界に多大の關係を有するに至れり、今此等三歌學書の分類形式を擧ぐれば、

和歌童蒙抄の分類
第一、天 部 第二、時節部 第三、地 部 第四、人 部 第五、人體部 第六、居處部 第七、寶貨部
第八、文 部 第九、武 部 第十、枝藝部 第十一、飲食部 第十二、音樂部 第十三、漁獵部 第十四、服飾部
第十五、資用部 第十六、神佛部 第十七、草 部 第十八、木 部 第十九、鳥 部 第二十、獸 部 第二十一、魚貝部
而して各々例を擧げて註釋せり。

天 部

天 ふかみどりいろことなりやあさまだき

かすみのひまにみゆるたほそら

古歌なり、みどりそらは青天碧空なり 樓炭經曰

須彌山は四寶のなせる處也黄金白銀水精瑠璃也高さ三百三十六里しも海に入れり形つゞみの様にて腰細し東面は黄金西面は白銀北面は水精南面は瑠璃也されは南瞻浮洲の空碧瑠璃にみどりに見ゆるなり。

地 部

土 たほつちもとればつくてふ世の中に

つきせぬものは戀にぞありける

萬葉十一にあり、たほつちとは大地といふことなり、廣くて極めなき故つきせぬ事にたとへたり。

綺語抄の分類

第一、天象部 第二、時節部 第三、坤儀部 第四、水 部 第五、海 部 第六、神仙部 第七、人倫部

第八、官位部 第九、人行部 第十、言詞部 第十一、居處部 第十二、舟車部 第十三、珍寶部 第十四、布帛部

第十五、動物部 第十六、植物部

童蒙抄と等しく各々例歌を擧げたり。

水 部

うすらひ(氷) 佐保川にこほりわたれるうすらひの

うすき思を我思はなくに

動物部

稻負鳥

山田もる秋のかりほにたく露は

稻負鳥の涙なりけり

植物部

藤 波

ほととぎすなくばかりにも散りにけり

さかりすぐらし藤波の花

同じく第一期の歌學書にして前二書と異なり、分類の形式頗る混亂せるものを了俊の師説自見抄とす。上卷に「歌言少々」「源氏言少々」「鳥類少々」など四十一種を擧げ下卷に神、佛、大嘗會、田家八十四種を擧げたり。

童蒙抄 綺語抄の分類と平安朝の辭書の分類とを比較せば全く其規を一にせるを知るべし、即ち童蒙抄 綺語抄の分類は全く此等辭書の分類形式より出でしものなり此等歌學書の此の如き分類研究法は歌史を完成すべき一助たるものなるも、惜きかな唯其範圍余りに廣からず其貢獻する所亦大ならざりき。然れども第一期歌學史上此の如き研究のありしは大に注目すべきことなりとす。

第六章

修辭的研究

余が第一期歌道の變遷を叙述するに當り茲に修辭的研究と名けたるものは稍々狹き意味にして、廣義に謂へば歌病にあれ、詠歌法にあれ、殆んど皆和歌の修辭的研究に外ならざるべし。

竹園抄曰、對言の歌といひて此道を能々秘するものあり其故は如何歌を讀むと思ふとも上下の相對する様

を不知は歌にあらず其對言といふはたとへば問答の如く上句に使ふべきを下句に心を(寫本一字脱)すなり謂はゞ上に「櫻」といひて下句に「匂ふ」とも「咲く」とも「散る」とも「木蔭」花の縁ある詞を對すなり「月」上にあらば下に「隈なし」とも「さやけし」とも可爲對哉或本に雙對亂對とて二つあり雙對とは題と題とを對し中と中とを對し下と下とを對するなり、

さくら花咲きにけらしな吹風の

二 句へる方になひく白雲

櫻花といへる對に句と讀み吹風に白雲を對するなり、上下に對して中を略するやうも有、中を對して上下を略するやうもあり、中略亂對といふは二種あり、一には上句の初の五の詞を下句の終に對し中を上を對し下を上中に對するなり、二には上の詞悉うけねとも上にある草木月花等を下對さねとも心ばかりを對するなり、

大方は歌は千萬多しともこの四つの對にすぐべからず、歌を讀まんと思はん人はこの旨を能々心得て可讀也、是れは殊に秘事なり、輒人に許すことあるべからず、如何に徳を備へ六義正しく讀む歌なりとも一切對言によるべきなり對言のしどげなきは歌にあらず。

此の如く歌學者が對言を以て歌の秘事とし、對言のしどげなきは歌にあらずとまで論ずるに至りしは、蓋し支那詩文の影響にあらざるか、而して歌學者の所謂對言は單に縁ある語といふにすぎず、支那詩文の對句或は今日の修辭學にいふ對照とは全く其の趣を異にせるものなり、歌學者のいふ對言は和歌に極めて多き修辭上の現象なり。秘傳口傳として輒人に許すべからずなどいふ仰々しきものにあらず。

竹園抄曰、親句疎句の秘事歌の由々もき大事也能々可秘親句に於て三種あり、一には響の親句、二には正の親句、響の親句に三種あり、五音相通五音連夢といふは五七五七七のうつりの響なり。される歌は歌の命なきなり、

ほのくくと遠の外山にき鳴くなり、

しばしかたらへねぐらさだめむ

是は郭公を讀める歌なり、昔歌は何んとも姿をあらはさねどもかくも續侍りき今代にはかゝるべからず「ほのくくと」をち」とは「を」の響なり。「しばし」といふは「し」の響なり「かたらへねぐら」とある「る」の響余なり、是にて可知此五句の續目々々に離れざるを五音連夢の親句歌といふなり。

二、正の親句とは響續かざれども詞の切れざるなり、正体を讀むとは其体を離れざる歌たとへば「よしの山」と讀てやがて「峯」とつゞき「さくら」といひてやがて「散る」といひて「花」とあり此歌の正の親句なり、是れは萬億の中の其一なり六義九章を離るといふともかくの如く讀みたるはよき歌なるべし、

三、疎句とは縦合響は不近其詞不切は心の離れぬ歌なり是れは能々手廣き事なり。

右の如き研究として丁俊の師説自見集兼良の歌林良材集あり。

第七章

其一第一期歌道と佛教との關係

平安朝の初期は佛教大に行はれたれども未だ形式上に止まりて進んで人心を支配するに至らざり然るに其の末期即ち鎌倉時代に移らんとする頃より佛教は次第に社會の思潮をも左右するに至りぬ、是に於てか時代精神の表示たる文學藝術の上には著しく其の影響を見るに至れり、歌道に至りては殊に甚しきものあり。

家隆卿和歌口傳曰、「歌は花鳥風月によせて詠ずとも必ず心に當つる所一かごあるべし、例へば佛教に通ずる心なるべし、歌は化言のいたすら事といふものあり方便世俗の假名を設けて愚なるものを導くにあり、釋尊西天に出で説法利生して諸々の國に従つて其の風俗の調を以て佛法實義を述べ給ふ。漢土にては文詞を以て人の心を和げ佛法弘通の方便とし我國には三十二字の言葉をも以て人の心を和らげて佛法の妙なることを知らしめ給ふ、されば歌は佛法の大意なるべし、かくの如く心得て歌を詞すべし」と、且て行基空海の徒出で、神道に佛教を附會して曰く、天照大神春日大神は佛の權化なり、佛法を日本に弘通せしめんが爲に假りに神として垂跡し給ふ、佛は本地なり、神は權化なり、と等しき説明法を用ゐて支那の詩賦日本の和歌は詩情を發露するものにあらず、佛が佛經を説き人間を救はんが爲めに國土に應じて假りに詩歌を顯し給ひしのみと、かくの如くんば歌に熱心深きものは自然の結果として佛道に入るべきなり、故に

近代風体抄曰　歌道に深く執する人は三昧に入るが如しと

附記〔三昧〕　衆生心行常不調不定不正入此三昧能調能直能定三昧者正定也

何ぞ其の説の奇なるや獨立を保つべき歌學は佛教を説くの方便とせらる此の如くして安ぞ詩歌の發達を期すべけんや、既に和歌の本領とする所、佛の道を知るにあれば其の詠歌方法も佛徒が三昧に入らんとするの修業と異ならざるべし、彼の心敬僧都私語曰

定家郷爲家郷の歌をいさめ被申侍るとなむ歌はさやかにどのゐ物にまつはれ灯ほからかにして酒肴取ちらしては出來ぬ道なり、深更に大殿あぶら細くあるかなきかにさし向ひてなをしのすふけたるに古き烏帽子耳まで入給ひ脇足により桐の火桶いただき詠吟の聲忍びやかにて夜ふけ入しすまりぬるにつけて打かたぶき

てまよとなき給へるとなむ思入給ひぬる姿有りがたくこそ侍れ、又俊成卿老後に言ひ給へりとなむすこしこの道にあかし心出給ひしに住吉大明神あらたかに現じ給ひ打ねみて示し給ひけるは歌道ををろかに思ひ給ふ事なかれ此の道にて必ず往生をとげ成佛じ給ふべし歌道は則身直路なりとあらたかにのべ給ひしとなり。

法華經は平安朝時代には一般社會に誦せられたり當時の物語等には吾人到る所其の影響を認むることを得歌道に於ては

三五記曰 三十一字は如來三十二相にかたざれり

長 歌——人間道 旋頭歌——修羅道

短 歌——地獄道 混本歌——餓鬼道

俳諧歌——畜生道 廻文歌——天道

附記「三十二相」は法華經第二譬喩品曰而今乃自覺非是實滅度若得作佛時具三十二相

人丸は歌道の守護神とせられ歌人の尊崇限りなかりしかば彼の歌「ほのく」と明石の浦」の如きは殆んど神秘視せられ第一期第二期の歌學書に殆んど解すべからざる説を以て附會せられたり、例へば

三五記曰、「ほのく」と明石の浦」と讀めるは御門の政曇りなくほがらかにたはしましつるを有爲無常の雲立ちたほひて生老病死の四魔といふもの君の船を犯し奉ると讀めり「島がくれ」と讀めるは實は生老病死の四魔なり。

此等の歌道に附會したる佛説は第二期の傳授的歌學に非常なる影響を及ぼし、第三期に至りてすら歌道根源

問答等の書は前述の附會説を列擧したるに過ぎざるのみ、勿論此の如き奇説は詩歌の發展に何等の益する所なきは論を待たざれども、其後世影響の大なる歌道史上決して觀過すべからざるものなりとす、猶橋守部の長明の無名抄の幽玄体なる語を解したる

守部著心の種曰、守部按ずるに茲にかく幽玄体といへるは定家卿のたてたまへる和歌十体中の幽言の事にあらず「風体抄云歌の道は深く執すれば佛の三昧に入るが如く心をしづめて深く幽玄の境に入て人のふるさぬ所を按ずべし」など云へる幽玄の類にて所謂無上至極の界と云へると同じ、の類第二期の歌學書に擧ぐるに違あらず。

其二 第一期歌道と神道陰陽五行説との關係

平安朝の末期より佛教我が國民の思想界を支配し神道はあれどもなきが如く衰退を極めたりと雖此の固有思想は猶歌道史の上に其面影を存し、又陰陽五行の説は支那より入りて平安朝に流行せしが此も亦歌道に附會せられたり、この兩説は第二期に至りては佛説と共に動かすべからざる大勢力となり、進んで第三期に至りてはこの神道説は古典學説に其位地を與へて歌道界を去り、陰陽五行説は、垂加神道によりて桂花鈿歌道根源問答に其生命を保てり、本より歌道に附會したる此等神、佛、陰陽五行説は歌學の發達を害したること大なるも三期を通じて其生命を保ち歌道界の一大勢力たりしなれば、吾人は此等の研究を徒に輕視すること能はざるなり、本章に於ては歌道に及ぼせる神道及陰陽五行説を便宜上併せ論せん」とす。

石見女式、三十一字極事 and 歌三十一字之神

海原彦宮、國常立、日向

八太郎宮、國狹槌、日向

鳥海乙宮、豐斟淳、出羽
志貴田下宮、沙土逐、河内
山邊宮、大戸間邊、大和
國津社宮、面足、大和
御熊野宮、伊弉諾、紀伊
久米曾禰宮、惶根、和泉
五十鈴宮、日神、伊勢
石田宮、手力雄、但馬
奥野宮、片倉邊、武藏
大津宮、大津彦、伊勢
春日宮、天兒屋根、大和
箕田宮、兒屋根、武藏
戸島宮、多禰祇禰、伊賀
大嶋宮、種子、和泉
丹生宮、宇佐津、紀伊

志貴手宮、泥土逐、大和
手島宮、大戸之道、長門
清瀬宮、王鬘、山城
白山宮、伊弉冊、加賀
階成宮、下照姬、肥前
住吉宮、彦波瀲、攝津
國上部宮、天稚彦、但馬
八幡宮、應神、山城
伊豆宮、忍穗耳、伊豆
栗崎宮、彦火々出見、大和
敷島宮、彦火々出見、大和
細方邊宮、押手尊、信濃
草原宮、種景、和泉
大海宮、天之多他良、住吉

已上三十一神歌守護神也

石見女式の説は和歌の五七五七七の五句に五行五佛五季を附會せしと同じく、三十一字なるより歌學者が思

ひつきしまゝ三十一神を和歌の守護神として列舉したるのみ、此の如く神道と歌道とは二にして一なりと説きたるもの其他少からず此の如き信仰は遂に國民一般に普及せられ若し已れ請願あらば和歌を以て神に祈るべし、神は其歌徳に感應せられ靈驗忽ちに至るなどいふ不可思議なる傳説となるに至れり、今、古事類苑文學部中より一二を擧ぐれば、

〔今昔物語二十四〕 大江匡衡が妻は赤染時望と云ける人の娘なり其腹に舉周をば産ませたるなり、其の舉周成長して文章の道に止事無かりければ公に仕りて遂に和泉守に成りにけり、其國に下りけるに母の赤染をも具して行きたりけるに舉周不思懸身に病を受け日來煩けるに重く成りにければ母の赤染歎き悲びて思ひ遣る方なかりければ、住吉明神に御幣を令奉て舉周が病を祈りけるに其御幣の串に書付て奉りたりける、

かはらんと思ふ命はをしからで

さてもわかれんほどぞ悲しき

と其夜遂に愈にけり、

〔十訓抄四〕 中納言道俊の子に世尊寺阿闍梨仁俊とて顯密知法にて貴き人たはしけるを、鳥羽院に候ける女房仁俊は女心あるものゝ空垂立けると申けるをかへりきゝて口惜しと思ひければ北野に参りてこの恥をすゝぎ給へと祈請して、

哀れとも神々ならば思ふらん

人こそ人の道は立つとも

と讀みければ其女房赤袴ばかりを腰にまきて錫杖を手に持て仁俊に空にと云付たる報ひよと云て院の御所に參つ舞ひ狂ひにけり、淺ましと思召して北野より仁俊を召て見せられければ神恩のあらたなるを感じて涙を流し一度慈救咒を唱給ければ女房本心に成りにけり、

右におげたるは神道を歌道に附會したる説の大畧なり、以下これより陳べんと欲するものは佛說陰陽五行説を一括して歌道に結び付けたる未曾有なる奇説にして到底今日より解すべからざるものなり、

石見女式曰、和歌之道者天神應神萬法妙体也兩句者天地陰陽胎金之二界也上者胎藏界下者金剛界也日月萬物藏之五七七七者五行五常五方五季也、

第一句春也春者自東來萬物始也 萬物象仁慈春之歌者爲仁歌仁者置六義第一句如此讀歌向東方發心法樂日神廻向阿彌佛而滅六根之罪可成佛果、

春のくる道こそすみれ春日山

峯の籬の色のくらすよ

第二句夏也夏自南來火方也火性赤萬物尊敬之方修業之道也以夏之歌爲禮之歌禮者置六義第二句火體也若此句勝自餘之句則作者有怪異火憎惡者也呪咀人者此句斂魂則必諧所存努々此句不可勝火句勝則作者有謬此方寶生佛所也向此方者有 有夏氣讀禮歌法樂蛭子尊廻向寶生佛而可懺悔 罪障、

押しなべて夏の景色はしられけり

山ほとゝぎすまたききなかず

第三句秋也秋自西來秋歌者義歌也置六義第三句金體也又此句勝自餘句則主不吉也金斷物義也 斷命菩提方

也菩提無常也無常勝則不吉也此句 不可勝自餘句讀秋歌爲法樂素戔鳴尊廻向無量佛可滅罪障

打つゞき野邊の氣色も秋として

薄穗に出る風の吹ぬる

第四句、中央也此句涉四句黃色也云圓滿又云極句云果句此句可勝諸句中此句口傳有三種深義句不勝作者不吉也置六義第四句神祝祇歌也稱之中央歌此句弱則無立天地五行之義故 此句弱歌者惡也是宜入一切神讀神祇歌爲法樂廻向大日法樂 天照大神而可滅罪障此信歌也

五十鈴川清き流の路とめて

天照神を拜みつるかな

第五句、冬也冬者自北來水句黑色也此句冬歌也置六義第五句可勝此句不勝歌者不吉也涅槃歌也讀此水歌而法樂月神廻向不空成就佛可滅罪障

山風は吹き凍りつゝ五十鈴川

水の色にぞ冬は見わけける

右の所説を通覽するに神道、陰陽五行説儒教を交へたれども要するに其の主とする所は佛教を説くにあり、余大藏法數を見しに左の圖説あり。

約五行消	火 六月	寄	九月	壬 十七月
三三本攝	夏 五月	土	八月	月 十七
	土 四月	四	七月	月 二十

右の圖説を基として石見女式の説を考ふればの次の圖の如くなるべし

南	姪 寶	信 歌	天 中	照 央	大 四	神 第
尊 生	佛 禮	佛 二	佛 二	佛 二	佛 二	佛 二
夏 二	夏 二	夏 二	夏 二	夏 二	夏 二	夏 二

第一身
 春 水
 同 佛
 日 轉
 東

紫 義
 尊 佛
 無 量
 義 金
 教 句
 三 第

北
 神 月
 佛 就
 成 空
 冬 水
 智 五
 句 第

右兩圖説を比較封照せば、石見女式の和歌論は前圖説に神道佛教儒教の諸説を添加したるものにあらざるか、此の石見女式の奇説は第三期迄其影響を及し、彼の歌道根源問答は多少の相異なるも全く此書の系統に屬するものなり、又家隆七卿和歌口傳の「五七五は陽なり七七は陰なり」など云ふ笑ふべき言も後世歌學者に影響を及ぼせしこと少からず、この他歌道に星學の説を附會して奇怪なる言をなすものあり。

(未完)

玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森、江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰、
叢菊兩開他日淚、孤舟一繫故園心、寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧、
千家山郭靜朝暉、日日江樓坐翠微、信宿漁人還泛々、清秋燕子故飛々、
匡衡抗疏功名薄、劉向傳經心事違、同學少年多不淺、五陵衣馬自輕肥、
蓬萊宮闕對南山、承露金莖霄漢間、西望瑤池降王母、東來紫氣滿函關、
雲移雉尾開宮扇、日繞龍鱗識聖顏、一臥滄江驚歲晚、幾回青瑣點朝班、

(杜甫)